

里帰りを果たした三田博物館の石碑

市役所西3号庁舎(旧市民会館)前で保存されていた三田博物館の碑が、ゆかりの屋敷町に戻されて4月5日に除幕式が行われました。市民会館は昭和46年の開館から郷の音ホールの完成までの間、市の文化活動の拠点として活用されました。石碑はその象徴でもありましたが、このたび40年ぶりに元の場所に帰還したことになります。

碑は三田盆地周辺部の基盤を構成する流紋岩質の溶結凝灰岩(市史第10巻地理編参照)で、現在の宝塚市波豆で採掘された石材が広く流通したことから波豆石と呼ばれています。代表的な採掘場は大正3(1914)年に着工された神戸市水道の千刈水源地に水没したので、同年に開館した博物館の石碑は、伝統ある波豆石のほぼ最後を飾る製品とも言えます。ちなみに移設の際にその重さは約1.2トンあることがわかりました。

碑に刻まれた「大正記念三田博物館」が館の正式名称で、大正改元を記念した命名です。この博物館は三田出身で帝国博物館(現・国立博物館)初代総長などを歴任した九鬼隆一氏のコレクションを展示し、社団法人大正記念三田博物館協会によって運営された私立では我が国最初とされる博物館です。国立博物館は明治5(1872)年に開設されますが、九鬼隆一氏は地方での博物館の必要性を説いています(明治33年『有馬会雑誌』第5号)。その要旨は、地方にも博物館を設置して地域独自の歴史と文化遺産の保存と顕彰をおこない、中央集権化が進む中での地域の独自性の維持をはかる。展示を特産品開発の参考や観光客の誘致に活用して地域の振興をはかる。さらには国立館との連携により博物館ネットワークを形成するといった趣旨で、110年以上前の主張とは思えない極めて斬新な考え方が示されています。そしてその理想はまず、氏の故郷である三田の地で実現されたのです。

三田博物館は我が国の博物館の歴史に燦然と輝く地位を占めており、碑はまさにその記念碑です。歴史的な景観に配慮して整備された市道を散策しながら、石碑に込められた先人の思いに触れてみてはいかがでしょうか。